

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

PDF版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

特集

語り合いを通して深める 幼児理解

名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部 教授 津金美智子

幼保連携型認定こども園 大徳学園 (石川県・私立)

名古屋市立第三幼稚園 (愛知県・公立)

データ

幼児期の家庭教育国際調査

CONTENTS

1

特集

語り合いを通して深める 幼児理解

16

データから見る幼児教育

幼児期の家庭教育 国際調査

目白大学 人間学部 子ども学科 准教授
荒牧美佐子先生

本誌をお手に取っていただき、ありがとうございます。

特集では、2園のご協力のもと、園内研修の様子や先生の体験談などをご紹介します。「幼児理解を深める」ために、立場を超えて「語り合う」場をつくる大切さと難しさを改めて実感する取材となりました。

話しやすい雰囲気をつくる・肯定的に意見を受け止めるなど、保育者の先生方が互いを高め合うために心がけることは、園の運営に限ったことではなく、組織で仕事をする上での普遍的なポイントだと感じました。

今号から、よりお役立ていただけるよう、誌面レイアウトをリニューアルしております。引き続き、ご活用いただけましたら幸いです。

最後に、ベネッセ教育総合研究所顧問の磯部頼子先生が6月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

『これからの幼児教育』編集部

「これからの幼児教育」2018年秋号

編集発行人/岡田晴奈 発行所/(株)ベネッセコーポレーション
印刷製本/凸版印刷(株)
編集協力/(有)ペンダコ、丹羽三千代 執筆協力/二宮良太
撮影協力/ヤマグチイッキ、松原誠 イラスト協力/アサナマリカ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。

©Benesse Corporation 2018



インタビュー

P.2

幼児理解を深めて子どもの学びの 過程や質を捉え、語れる保育を

名古屋学芸大学
ヒューマンケア学部
教授
津金美智子先生



語り合いを通して深める 幼児理解



新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、
幼保連携型認定こども園教育・保育要領が施行された今、
これまで以上に子どもを見取る力、幼児理解が重要になっています。
日々の保育の中に幼児理解のきっかけ、ヒントを見いだし、
保育者一人ひとりの力を高める方法について考えていきます。

幼児理解を深める 園での対話

P. 4

事例1
ロールプレイングを取り入れ
子どもの思いを肯定的に
読み取る力を高める

幼保連携型認定こども園
大徳学園 (石川県・私立)

事例2
エピソードを語り合い
「10の姿」を通して
育ちを捉える視点を育む

名古屋市立
第三幼稚園 (愛知県・公立)

インタビュー

P. 12

園全体で幼児理解を深める
園内研修のポイント

名古屋学芸大学
ヒューマンケア学部 教授
津金美智子先生

保育者が振り返る

P. 14

幼児理解が深まった
あの頃、あの場面

大徳学園 1歳児担任
池上千尋先生

名古屋市立第三幼稚園 主任
堀 智重子先生

名古屋市立第三幼稚園 園長
伊藤茂美先生

幼児理解を深めて 子どもの学びの過程や 質を捉え、語れる保育を

名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部 教授 津金美智子先生

つがね・みちこ 名古屋市公立幼稚園園長や文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官・視学官などを経て、現職。厚生労働省保育士養成課程等検討会構成員や国立教育政策研究所幼児教育研究センターフェローなどを歴任。編著書に『平成 29 年版 新幼稚園教育要領 ポイント総整理』（東洋館出版社）など。



子どもを肯定的に捉えることが、幼児理解の出発点

新要領・指針を機会に 幼児理解をさらに深める

幼児教育は「幼児理解に始まり、幼児理解に終わる」と言われるように、これまでも幼児理解の大切さは常に語られてきました。それにもかかわらず、今、改めて幼児理解を深めていく必要があるのは、今年度に施行された新しい幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、「新要領・指針」）の理念を実践するために、一人ひとりの子どもの姿の変容を捉え、評価し、保育の改善に生かすことが欠かせないからです。

新要領・指針では、「幼児教育において育みたい資質・能力（3つの柱）」「10の姿」「カリキュラム・マネジメント」など、新たな内容がたくさん示され、これらをどう実践していくか、まさに試行錯誤されているさなかだと思えます。理念は理解できたものの、実際の保育に結びつけるのが難しいと感じている先生も、多いのではないのでしょうか。

例えば、今回の改訂・改定のポイントの1つは、ご存じの通り、幼児期に育みたい資質・能力が明確化されたことです。遊びを通しての総合的な指導により、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」を培い、小学校以降の

育ちにつなげることが求められています。

これらの資質・能力は、保育者が意図的、計画的に構成する環境のもとで、保育者や友だちとのかかわりやさまざまな体験の中で伸びていきます。

遊びや生活を充実させるためには、目の前の子ども一人ひとりにどのような力が育ちつつあるかを適切に評価して、次の指導につなげる必要があります。しかし、幼児理解が不十分であれば、子どもにどのような資質・能力が育ちつつあるかや、発達上の課題を把握できず、有効な指導計画も作成できませんし、「ただ遊んでいるだけ」という状態になってしまう可能性があります。

5歳児修了時までには育ってほしい資質・能力を具体的に示した「10の姿」も同様です。日々の遊びや活動を通して子どもの育ちやその過程での学びを保育者が丁寧に見取ってこそ、「10の姿」と照らし合わせて何が育っており、何をもっと伸ばしたいからといった根拠をもって遊びや活動を構成することができます。

幼児理解に基づく、子どもの育ちやその過程での学びの「言語化」「見える化」は、社会的にも求められています。昨今、幼児教育無償化が議論されるなど、社会的に幼児教育の重要性に対する認識が高まる中で、今後は子どもにどのような力が育っているのかを、保護者や地域の方々、小学校教員などに伝える専門性



がますます求められるでしょう。

みなさんには、新要領・指針の施行をよい機会として、今一度、子どもの姿を学びの視点で見つめ、幼児教育のさらなる充実につなげていただきたいと思います。

「目」が物語る 子どもの思いをくみ取る

ここで確認の意味を込め、幼児理解に大切な心構えを整理したいと思います。

幼児理解の原点は、子どもを肯定的に見取ることです。一人ひとりをいとおしく思い、大きな可能性を秘めていることを信じ、その言葉や表情、わずかな動きの変化に込められた意味に気づき、受け止める。日々そうした姿勢で子どもに接することで、幼児理解は深まっていくでしょう。子どもの姿を分析的に見るのではなく、子どもと一緒に歩いていく気持ちで、子どもの思いをくみ取る姿勢が大切です。

5歳児になると言葉から育ちを読み取れるケースが増えますが、まだ語彙が少ない子どもは「目」が物語ることが多いと感じます。例えば、友だちが上手にしゃぼん玉を膨らませるのをじっと見つめる子どもは、何を感じ、考えているのでしょうか。子どもが見つめる先は、しゃぼん玉か、吹き具か、それとも友だちの手つきや空気で膨らんだほっぺたか。そのいずれなのかによっても保育者が読み取れる意味が変わるかもしれません。こうした視線の意味に保育者が気づけると、次にどうかかわると子どもの発達や学びを促せるかが見えてきます。

子どもの育ちを 学びの過程や質を捉えて語れるか

幼児理解を進める上では、明確な根拠をもって子どもの姿を捉えることも大切です。単に「今日は〇〇を楽しんでいた」では、子どもの中にどのような学びがあったのかが見えません。「何を面白く感じたのか」「どんな気づきや発見があったのか」「何が不思議さを探究する支えになったのか」「もっと楽しむために何をしようとしていたのか」など、状況に応じてさまざまな視点で子どもの姿を見つめてみましょう。

私自身、新任の保育者の頃に、「子どもは何を楽しんでいるか」と、先輩保育者から繰り返し質問されたことを思い出します。経験が浅い時期に答えるのはなかなか容易ではありませんが、それでも考え続けることで保育者としての力が高まります。

それには、子どもの姿を記録することが大切です。長々と書く必要はなく、メモでもかまいません。毎日、すべての子どもをじっくりとは見られなくても、1日に1つや2つは、「これは！」と感じる瞬間があるでしょう。そうした気づきを記録していくことで幼児理解が深まっていくのです。

幼児理解のポイントである「肯定的に見取る」「根拠をもって語る」を園でどのように実現するのか、その具体例を次ページから見ていきましょう。さらに12ページからは、園全体で保育者の幼児理解を深めるためのポイントを、再び津金先生に解説していただきます。



ロールプレイングを取り入れ 子どもの思いを肯定的に 読み取る力を高める

取り組みの ポイント

記録や園内研修など、保育者が**日常的に幼児理解を深める**仕組みをつくる。

園内研修では保育者の**迷いや疑問をテーマに、
ロールプレイング**も取り入れ、子どもの気持ちを読み解く。

話し合いでは**子どもを肯定的に捉える**ことを意識する。

保育者の迷いや疑問をきっかけに幼児理解を深める

ロールプレイングを通して 子どもの言動の意味を探る

「すべては子どもの幸せのために」を教育理念とし、子どもが落ち着いて過ごし、異年齢グループで遊び込める環境づくりに力を入れる大徳学園。子どもが自由な発想で遊びを広げ深められるように、時間と空間を確保することを特に大切にしています。園長の浅香聡彦先生は、「優れた学び手である子どもは、社会で必要な力を遊びの中から学び取っていきます。保育者は子どもの主体的な学びを支えるために、その言動から意味を読み取り、常に肯定的に働きかけることを心がけています」と話します。

遊びを豊かにするためには、子どもの興味・関心の微妙な変化に気づく必要がありますが、そうした幼児理解の力は一朝一夕には身につかないと浅香先生は言います。

「常に子どもをしっかりと理解しようと努め、日々の記録を通して自分の見方を振り返る。そして、ほかの保育者と子どもの姿について意見を交わし、1つの場面でも多様な見方があることに気づく。若手やベテ



大徳学園
園長
としひこ
浅香聡彦先生



大徳学園
教頭
藤井しのぶ先生



大徳学園
2歳児担任
堀田洋子先生



大徳学園
1歳児担任
池上千尋先生

ランを問わずに、そうした経験を繰り返すことで幼児理解は深まります」

保育者は毎日の記録のほか、自主的にエピソード記録をつけたり、保育の場面をビデオ撮影したりしています。さらに、保育者間で積極的に情報共有を図り、困っていることや意見を聞きたいことがある保育者の

呼びかけで、園内研修を頻繁に実施しています。保育者自身も、また園全体としても、日々の保育を振り返ることが日常的に行われています。大徳学園の保育者

がどのように幼児理解を深めていくのか、ある日の園内研修の例を見てみましょう。

保育者A先生の課題提起がきっかけで行われた研修とそこでの対話

研修実施までの経緯と保育者A先生の振り返り

保育者歴3年目のA先生が担任をしているクラスの子どもとのやり取りを通して課題を感じ、園内研修を呼びかけました。研修にはほぼすべての保育者が参加。子どもの降園後、グループディスカッションや課題を感じた場面のロールプレイングを1時間ほど行いました。



1歳のYちゃんは、Sちゃんが遊んでいたパズルを無理やり取ってしまいました。保育者がYちゃんに「①Sちゃんが今このパズルをしているみたいだよ」と声をかけると、怒って大声を上げます。「②Yちゃんも、このパズルをしたいね」「③でもSちゃんがしているから、待てよう」と話すと、「うん」とうなずきました。別のパズルに誘うと首を横に振り、嫌がる様子でした。

Yちゃんは自分でほかの遊びを探し始めましたが、見つけれずにマグネットを口に入れました。「Yちゃん、『ペ』してくれる？」と声をかけると、口から出しました。「Yちゃん、何して遊ぶ？」と聞くと、自分から「これ！」と言って別のパズルを始めました。保育者が隣で見守るうちに完成させて「できた！」とうれしそうに見せます。「④Yちゃんできたね。すごい！」と認めるとうれしそうに笑い、パズルを元の場所に戻しました。「⑤ありがとう」と伝えると、満足した表情で保育者の目を見て、ほかの遊びを探し始めました。

保育者A先生の課題意識

◎Yちゃんにほかの子どもの遊びを“邪魔する”などの行動が見られるようになり、気になっていました。この日もSちゃんのパズルを“横取りする”のを見て、「またしている」とマイナスの感情を抱いてしまいました。最終的に別のパズルで満足してくれましたが、一連のやり取りを振り返ると、もっとよい働きかけができたのではないかと思います。園内研修のテーマとして取り上げてもらいました。

グループディスカッション

園内研修ではまず、エピソードをもとに子どもと保育者の言動の裏にある思いについて意見を交換しました。主に次のような意見が出されました。

①「Sちゃんが今このパズルをしているみたいだよ」

「保育者のやめてほしいという気持ちが伝わった」
「もっと自分を見てほしいという気持ちになったかもしれない」

②「Yちゃんも、このパズルをしたいね」

「自分の気持ちをわかってくれる先生を味方だと感じた」
「Yちゃんの気持ちを理解し、次の行動につなげた」

③「でもSちゃんがしているから、待ってよう」

「『いよう』という語尾に発言の強さが感じられる。言い方、表情、子どもに対する姿勢はどうだったのか」
「待っていることを強制され、気持ちを押しつけられたように感じた」

④「Yちゃんできたね。すごい!」

「保育者は、Yちゃんと気持ちを共有し、できたことの喜びを感じている」
「Yちゃんは達成感をもち、共感してもらえたことで、さらに喜びの気持ちが強まった」

⑤「ありがとう」

「大好きな先生に感謝の言葉を言われてうれしい。自分のことをわかってもらえた。遊びに満足し、達成感にあふれている」



ロールプレイング

話し合いの中で、①の「Sちゃんが今このパズルをしているみたいだよ」という言葉の裏には、「またしている」というマイナスの感情が感じられるという意見が出ました。さらに、同じ言葉であっても、保育者の気持ちによって伝わり方が変わるとの指摘があったため、①の発言を3通りの気持ちで伝えるロールプレイングを行いました。

「Sちゃんが楽しそうということ伝えたい」という気持ちのとき

「Yちゃんは保育者の笑顔を見て『先生はきっと自分の気持ちもわかって守ってくれる』と感じる」

「またしている。しないで!」という気持ちのとき

「より強く言われた気持ちになり、叫びたくなる」

「Sちゃんのパズルを取らないで!」という気持ちのとき

「『あなたが悪いでしょ』という保育者の気持ちが伝わってくる」

そのほかの意見

「笑顔か、無表情か、困った顔かによっても、気持ちの伝わり方が変わる」

「言葉、気持ち、表情をリンクさせることが重要であり、どれか1つでも一致しないと保育者の思いは伝わらず、子どもは混乱し不安になる」

保育者A先生の気づき

◎最初はYちゃんに対してマイナスの感情を抱いてしまいましたが、今後は「友だちに興味をもち始めてかかわろうとしている」「遊びに意欲的な姿が見られる」などYちゃんを肯定的に捉えていきたいと思いました。最近、保育者の注目を引こうとする行動も見られるため、ゆったりとかかわりながら1対1の時間を大切に、肯定的な言葉をかけていきます。また「大好き」という気持ちも伝えていきたいです。

「肯定的に捉え、認める」は 保育者同士でも大切

エピソードをもとにした園内研修によって、保育者一人ひとりに気づき生まれ、幼児理解が深まっています。4年目の池上千尋先生は、「研修を重ねることで、子どもへの働きかけが単調だと気づきました。徐々に子どもを捉える視野が広がってきたと感じています」と話します。

今回の研修で、特に参加者の気づきが大きかったのがロールプレイングだったといいます。堀田洋子先生は次のように語ります。

「実際に役割を演じると、同じ声かけでも保育者の気持ちや表情の違いにより子どもの受け止め方がまったく異なることがわかりました。多くの保育者が『こんなに違うのか』と驚き、その後の保育で意識するようになりました」

初めにYちゃんの行動にマイナスの感情を抱いていた担任のA先生の考え方は、研修を通して「プラス面を捉えていきたい」と大きく変わりました。堀田先生は、「話し合いの中で参加者が『友だちに積極的ににかかわり始めたのはよいね』など、Yちゃんのよい面をたくさん見つけて共有したことがよかったです」と振り返ります。

研修では、担任のかかわり方でよかった点を挙げたり、励ましたりする意見も多く出されました。そのことで、担任のA先生が前向きな気持ちになり、他の保育者も自分のこととして考える姿が見られました。

「研修では、子どもだけではなく、保育者に対して肯定的な言葉をかけて支えることを大切にしています。だからこそ、若手やベテランを問わず、『自分の課題を研修で取り上げてほしい』と、研修に前向きになってくれるのだと思います」（浅香先生）

研修後、担任のA先生は以前よりYちゃんを肯定的に捉えて接するようになりました。すると、徐々にY

ちゃんの気になる行動が減り、自由に伸び伸びと活動するよい面が強く表れるようになっていきました。

研修での話し合いは 必ず具体的な行動に結びつける

園内研修では、参加者が自由に話せる雰囲気づくりにも努めています。ファシリテーターを務めることが多い教頭の藤井しのお先生はこう話します。

「各グループを回って途中経過を共有して、『なるほど、そういう見方ができるね』と共感を示したり、『私は○○だと思うな』とあえて一言残して話し合いを促したりします。あまり形式にこだわらず、和気あいあいと楽しい雰囲気を保つことも自由な発想を促すポイントです」

また、効率的に話し合えるように、事前に園の共有サーバ上に研修テーマを提示し、保育者それぞれがパソコンから意見を書き込めるようにしています。研修の当日は、集まった意見を参照しながら話し合うため、短時間でも考えが深まりやすくなります。

研修で話し合った内容は、翌日からの保育で具体的な行動に結びつけることも意識しています。

「話し合いだけで終わると、『研修は実際の保育に役立つ』という実感をもてません。そこで必ず何かをやってみることを心がけています」（浅香先生）

しかし、新たな実践を取り入れても必ずしも好影響があるとは限りません。ときには失敗と判断してやめることもあるといいます。

「子どもの気持ちは絶えず変化しますから、保育者が常に迷い、悩んで当然です。幼児理解は、試行錯誤を通して深まっていくのだと思います。『子どもはこうだ』と決めつけるようになると保育者の成長はストップしますし、子どもとの関係を深めることはできないでしょう。園が、常に保育者が考え続け、学び続けられる場でありたいと思います」（浅香先生）

幼保連携型認定こども園 大徳学園

◎異年齢グループの遊びを通し、子どもが1人の人間として幸せに生きていくための力を育むことに力を入れる。人への信頼感を育てるために乳児期の食事や排泄は決まった保育者が担当するなど、子どもの気持ちに寄り添った保育を実践する。

園長 浅香聡彦先生
所在地 石川県金沢市畝田中1-97
園児数 169人

エピソードを語り合い 「10の姿」を通して 育ちを捉える視点を育む

取り組みの ポイント

子どもの中に「やってみたい」という興味・関心を育み、豊かな遊びにつなげる。

保育者同士の語り合いで幼児理解を深めた後、「10の姿」の視点をういて育ちを言語化し、共有する。

次の手立てを考える保育者のフォローに力を入れ、子どものさらなる育ちを引き出す。

子どものそばにただ寄り添い、同じ目線で遊びを見つめる

保育者同士の語り合いで 子どもの姿が立体的になる

名古屋市立第三幼稚園は、大正期の創立以来、遊びを通して一人ひとりの子どもの育ちを支える保育を大切にしてきました。その保育の原点は、子どもの内面に働きかけ、「やってみたい」という興味・関心を育てることだと、園長の伊藤茂美先生は話します。

「自分がやりたいと思ったことを実現できた経験が自信となり、友だちを受け入れてかかわれるようになります。そこで、発達段階に応じて興味・関心を育む環境構成を大切にしています」

例えば、5歳児は生活の中に行事を位置づけて友だちと一緒に頑張れるように、ダイナミックでつながりをもったごっこ遊びを共有スペースいっぱいに展開します。そこで1人でやりたいことを見つけて遊びを広げられる子どももいれば、自分から気持ちを表したり行動に移したりするのが得意ではない子どももいます。そうした子どもの思いを支えるため、保育者は一



名古屋市立
第三幼稚園
園長

伊藤茂美先生



名古屋市立
第三幼稚園
主任

堀 智重子先生

人ひとりのつぶやきや表情の変化を見逃さないように努めています。

「まずは、話しかけることをあえて控え、子どものそばに寄り添い、同じ目線に立って遊びを見つめること。それが、保育者と子どもの関係性の基本だと考えています。気負わず、一緒に同じものを見ていると、子どもは言葉や表情などで思いを発信しますので、それを受け止めて必要な場面で手を差し伸べるようにしています」(伊藤先生)

こうした見取りをさらに深めるのが、保育者同士の語り合いです。主任の堀智重子先生はこう話します。

「日程の定まった園内研修以外にも、仕事の合間の会話などを通して、子どもの姿を語り合っています。保育者一人ひとりがかかわった場面を共有することで、子どもの姿が立体的になり、つながっていきます。

自由に意見を述べ合う中で保育者の幼児理解も深まります」

実際に園内で語り合った事例をもとに、保育者が幼児理解を深めていく様子を見てみましょう。

2つのエピソードと研修での対話

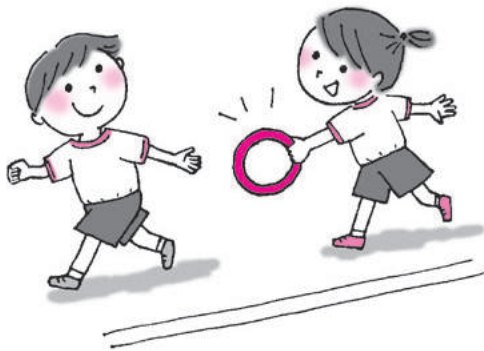
担任の記録から

エピソードをもとにした語り合いは、形式にとらわれず、時間を有効に活用して行っています。担任の記録から、運動会のリレーに関する5歳児の2つのエピソードを共有し、子どもの育ちを語り合った事例を取り上げます。

エピソード1 リレーの走順決め(5歳児)

運動会の練習で、リレーの走順を話し合いました。こうした話し合いにほとんど加わりたくないAちゃんに気づいた周囲の子どもが、「何番がいい？」と聞くと、Aちゃんは「1番ならいい」と答えました。先に1番に走ると言っていたBちゃんは「じゃあ、ずれてあげる」と言い、Cちゃんは「でも、その代わりに本気で走ってね」と言いました。Aちゃんは1番に走り、皆でリレーを頑張れたことを喜びました。

翌日の練習でAちゃんがアンカーの8番を希望すると、Dちゃんは「昨日は1番で走れたから、1番がいいんじゃない？ すぐに終わるもん。前に1番じゃないとき、いなくなっちゃったよね」と言いました。Aちゃんが「でも8番がいい」と言ったので、担任が「Aちゃんがちゃんといってくれたらいいんだよね」と投げかけると、Dちゃんも「うん、ちゃんといてよ」と言い、Aちゃんは8番目までいて、走ることができました。



エピソード2 リレーの練習(5歳児)

リレーの練習でほかのクラスに負けてしまい、Eちゃんが泣いていました。それを見たFちゃんは「Eちゃんが泣いている……。自分も抜かせなかったし、チームも負けて悔しいんだって」と言い、自然発生的に話し合いが始まりました。

「バトンを渡すのがうまくいかなかったから練習した方がいい」

「カーブでもっと頑張るといい。抜かされそうだった」

「みんなで最後まで頑張って走ろう」

さまざまな意見が出されました。担任が「何を頑張るといいかな？ どうやって走るといいと思う？」と投げかけると、「腕をめっちゃ振る」「足の幅を広げて走る」「手に力を入れてグーにする」といったアイデアが出てきました。その後、担任が見守っていると、お弁当の時間を挟み、子どもたちは自分たちでバトンの受け渡しの練習を始めました。



子どもの姿の語り合い

2つのエピソードの背景には、子どもたちのどのような思いが込められているのでしょうか。保育者が自由に語り合い、さまざまな角度から子どもの育ちを見取っていきました。

エピソード1 リレーの走順決め(5歳児)

保育者たちの発言

「クラスの子もたちがAちゃんのことを気にかけて、気持ちに寄り添おうとしている」
 「Aちゃんを受け入れながら、チームとして走ろうという気持ちが出てきている」
 「Aちゃんにも走ってほしい。しかも本気で走ってほしいという気持ちが見られる」
 「Bちゃんは『代わる』『譲る』ではなく、『ずれる』という言葉を使っている」
 「クラスで生活や行動を一緒にする中で、Aちゃんは遅い順番だとその場からいなくなってしまうので、早く走った方がいいとわかり、どうすればよいかを考えている」
 「Aちゃん気持ちとチームが勝ちたい気持ちとの間で、揺れ動きながら考えている」

担任保育者の気づき

「それまでは、『自分がAちゃんをしっかりとサポートしなければ』と悩むことがありましたが、もっとクラスのみんと一緒に考えて支え合えばよいという考え方に変わり、気持ちが楽になりました。周りの子どもを巻き込むことで、Aちゃんだけではなく、クラス全体の育ちにもつながると考えるようになりました」

エピソード2 リレーの練習(5歳児)

保育者たちの発言

「負けて悔しいという感情を味わっている」
 「自己中心的な言動が見られていたEちゃんが、自分が抜かせなかったことだけではなく、チームが負けたことが悔しいという気持ちも出てきている」
 「友だちの気持ちをわかろうとしている」
 「みんなで話そうという雰囲気ができている」
 「自分も頑張るし、友だちにも頑張ってもらいたいという気持ちが見られる」
 「どうしたら速く走れるか、勝てるかを、自分なりに考えて伝えている」
 「友だちの考えをしっかりと聞いている」
 「普段発言しないGちゃんが積極的に発言して、そのことに気づいた周りの子どももよく聞いていた」

担任保育者の気づき

「保育者が『こうすれば勝てるよ』と教えるのではなく、負けて悔しい気持ちをもとに自分たちの問題としてみんなで考えたからこそ、たくさんのアイデアが出てきて、自主的に練習しようという気持ちになりました。子どもの『やってみよう』という気持ちを引き出す言葉かけの大切さに改めて気づきました」

「10の姿」をもとに子どもの育ちを確認

2つのエピソードから読み取れる子どもの育ちを考え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」の文章の中で、該当する部分にアンダーラインを引いて確認しました(下記は一部抜粋)。

協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

「10の姿」を活用して 遊びの中の育ちを可視化

同園では今年度より、エピソード研修などの際に「10の姿」を活用して子どもの育ちを捉え直しています。

『10の姿』の視点から子どもの姿を捉えると、1つの遊びの中には複合的な育ちがあることに改めて気づくことができます。幼児理解を深めていく上で、大きな手がかりになっています」（伊藤先生）

今回の研修でも、「10の姿」の視点から子どもの育ちを確認したところ、「協同性」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」を始め、8つの姿に関連する育ちが見えてきました。特に【エピソード1】では、Aちゃんの成長だけではなく、周囲の子どもにも多くの育ちが表れていることを保育者間で共有できました。

また、「10の姿」を活用することで、特に経験の浅い保育者が、遊びの中に育ちがあることを捉えられるようになりました。子どもがどのように育っているのかが理解でき、保育への自信にもつながりました。

その一方で、注意していることもあります。

『10の姿』の視点にとらわれ過ぎて、幼児理解の視点が固定化してしまわないよう、常に留意しています。そうならないように、1人で考えるのではなく、みんなで話し合っ一緒に考える機会を設け、できるだけ視点を広げるようにしています。『10の姿』は子どもの育ちを語り合う際に園内の「共通言語」としての役割を果たしていると感じています」（伊藤先生）

「10の姿」の視点をうれば、すぐに保育者一人ひとりの幼児理解が深まるわけではありませんが、それを参考にして話し合いを重ね、実践に生かしていくうちに、徐々に本当の理解につながっていくようです。

「たとえ、その場では腑に落ちなくても、先輩の保育者などから『この姿がこんな育ちにつながる』と聞くことに意味があります。『そういうこともあるのか』と知っておくと、経験を重ねるうちに、『あのときに

言われたことは、こういうことか』とわかる時がきつと訪れます」（堀先生）

見えた育ちを 明日の保育につなげる

同園では、子どもの育ちを見取った後の、次の実践につなげるフォローを大切にしています。

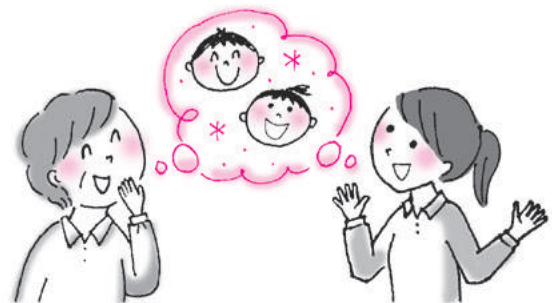
『こんな成長があった』とわかったら、タイミングを逃さずにさらなる育ちにつなげる支援を考えて実践することが肝心です。しかし、若い保育者は手立ての引き出しが限られています。机上での理解を具体的な手立てにつなげるため、環境構成や言葉のかけ方など、『次に何をして、どのような育ちを引き出すか』までを一緒に考えています」（伊藤先生）

また、具体的な手立てを行う際には、若手の保育者が新しいことを試みる姿勢を励ますことも大切にしています。

「できるだけ一緒に保育を見て、『〇〇ちゃんがよい表情をしていたね』とよかった点を見つけて共有するなどして、保育者の頑張りを認めています」（堀先生）

今後も幼児理解を深めながら、子どもとともに保育者が成長できる環境づくりに取り組んでいきます。

「幼児理解を出発点として、いかに子どもの思いにぴたっと寄り添って信頼関係を築き、『もっとやりたい』という気持ちを引き出すか。常に次の成長を見すえた支援を考え、『主体的・対話的で深い学び』の実現をめざしていきたいと思います」（伊藤先生）



名古屋市長
第三幼稚園

◎創立1915年（大正4年）の歴史ある幼稚園。3世代で通う家庭も多い。「自分に自信をもって行動する幼児の育成」をめざし、今年度は「ごっこ遊び」を通して必要な援助や環境構成を研究している。

園長 伊藤茂美先生
所在地 愛知県名古屋市長区那古野2-15-1
園児数 86人

園全体で幼児理解を深める 園内研修のポイント

名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部 教授 津金美智子先生

前半では、これからの幼児教育ではますます幼児理解が大切になることをお伝えしました。ここからは園内研修などを通して、保育者の幼児理解をいかに深めていくかを解説します。



保育者が互いの幼児理解を共有し、深め合う

感動を共有して 保育者を育てる

保育者の幼児理解がなかなか深まらないと感じる園長先生は多いようです。子どもに育ちつつある力を見逃さない感性や目のつけどころは、どのように育てるとよいのでしょうか。

子どもの姿から何を感じるかは保育者によるところが大きく、「こう感じなさい」と一方的に伝えるのは困難です。そのため、指導というよりも子どもの育ちを共有し、保育者の共感を引き出すことを大切にしてください。経験の浅い保育者は、「子どものどこをどのように見ればよいか」という視点が弱いことが多く、担任として一人ひとりの遊びの場面をじっくり見届ける時間をもちづらいことが、幼児理解が深まらない大きな要因です。その点、園長先生や主任の保育者は園全体の子どもの姿を把握しながら「ここは!」と感じた場面をじっくり捉えるチャンスが多いはずです。園長先生が子どもの姿に感動したら、その気持ちを率直に表し、「今日、〇〇くんの言葉から、こんなことが感じられたよ」と、共有しましょう。その際は、なぜそう感じたかという根拠もしっかりと説明してください。保育者が目のつけどころや考え方を身につける材料となります。こうした経験を重ねるにつれて幼児理解が深まり、「子どものこんな姿から、こういう気持ちや姿勢が育ちつつあると感じました。『10の姿』で言うと、△△の力にあたると思います」などと、具体的に語れるようになっていくでしょう。

「私はこう捉えた」と みんなで語り合える研修を

幼児理解を深めるために、子どもの育ちについて語り合う研修も効果的です。その際、大切なのは、誰もが意見を出しやすい雰囲気をつくることです。そもそも、**幼児理解には保育者の主観が入ることが避けられず、決まった答えもありません。自分の考えと違って**も、「**そういう見方もあるね**」と受け止める姿勢が大切です。「見るポイントが間違っている」などと指摘されたら若い保育者は萎縮してしまいます。常に肯定的に捉えるという点が大切です。

園内研修をどのように進めると、幼児理解が深まりやすくなるのでしょうか。図1はある事例をもとに園内研修の流れを想定して、子どもの行動を支える気持ちや、育ちつつある力をまとめたものです。

まず、写真や動画を交えてエピソードを共有し、それぞれの保育者が子どもの姿に込められた意味を考え、視野を広げていきます。その際、特に意味があると感じられる子どもの姿を切り口にすると、話し合いが深まりやすくなります。この事例では、「1個ずつお菓子を配っていた子どもが、ひとつかみずつ配り始めた」という行動の変化を切り口にしました。

私はこの行動を通し、早く配り終えたいという目的のもと、1人1個という「数」が、ひとつかみという「量」に置き換えられたことに注目しました。「10の姿」で言うと、「数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚」が育ちつつあると感じられたのです。もちろん、異な

る見方もあるでしょうから、園内研修でさまざまな考えを共有してほしいと思います。

次に、この学びを支えた子どもの気持ちを推測します。この事例は「配る係として役割を果たそうとする意識、自覚、責任感」「葛藤する自分を受け入れて待ってくれる友だちの表情や友だちとの関係」などが、それにあたります。「10の姿」につながる育ちが多く感じられました。園内研修でも、「こんな学びや発見、気づきがあった」という姿を掘り下げて、子どものどのような思いや育ちがその学びを支えているかを語り合うと、子どもを見取る力が高まるでしょう。

さらに、こうした育ちを踏まえた次の援助を考えます。この事例では、責任をもって判断する力が育ちつつあることを踏まえ「子どもが自分で考えたり判断したりできる機会（買い物ごっこや係など）を意図的に計画し、教師の援助や環境の構成を工夫」としました。

子どもの育ちを捉え 資質・能力の育成につなげる

ここまでの話し合いでも、幼児理解が深まり、保育や評価の質向上にもつながるはずですが、さらに理想を言うと、3つの資質・能力の柱がそれぞれどう育っているかまで話を深められるとよいでしょう。資質・能力と保育とのつながりが見えにくいという声も聞かれますが、エピソードをもとに語り合うことで具体的に捉えやすくなると思います。

この事例では、「知識・技能の基礎」は、「自分に関係の深いおやつで、配る係としての責任感から、数や量を実感として捉える」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」は、「自分の感覚から予想して、もっとよい方法を考える。配り方を試す。よい方法だったか判断する」などしました。

こうした園内研修では、ぜひ園長先生も、若い保育者やミドルリーダーと一緒に子どもの育ちにまつわる感動を語り合ってください。幼児教育において「語り合い」が今ほど求められている時代はないと思います。語り合いを通して幼児理解を深めていくほど、一人ひとりの子どもへのいとおしきは増し、園全体の保育内容の質がさらに向上するでしょう。

園内研修で話し合いたいポイント

事例 グループで食べるおやつを保護者と買いに行く当番だったA児は、小さなスナック菓子がたくさん入った商品を持ってきた。初めはグループの1人に1個ずつ配ったが、なかなか配り終わらない。しばらくすると、ひとつかみずつ配るようになった。

話し合いたいポイント 1

幼児が「ひとつかみずつ配る」姿から読み取れること

- ◎ 1人に1個ずつ、お菓子の数と相手を対応させて配っていた
- ◎ 配りながら、初めて1箱に入ったお菓子の数の多さを実感した
- ◎ 早く配り終わるために、1個ずつではなく、つかんで配ることを考えた
- ◎ ひとつかみずつ配りながら、数が量に置き換えられることに気づいた
- ◎ ひとつかみでこぼれない量は、同じ量として捉えた

話し合いたいポイント 2

上記の学びを支えたもの

- ◎ 自分が好きなお菓子は（グループの）みんなも喜ぶだろうという気持ち
- ◎ 配る係として役割を果たそうとする意識、自覚、責任感
- ◎ なかなか配り終われないことへの気づきと葛藤
- ◎ 葛藤する自分を受け入れて待ってくれる友だちの表情や友だちとの関係
- ◎ 待ってくれる友だちの気持ちから考えを巡らせる時間、折り合い
- ◎ 配り終えた満足感、自己有能感、自己肯定感

話し合いたいポイント 3

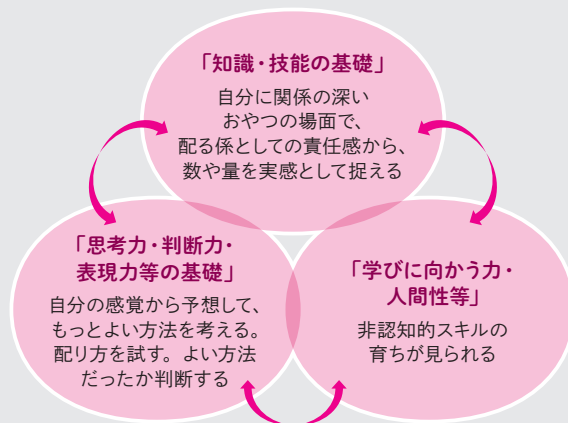
上記の成長を踏まえた次の支援

- ◎ 子どもが自分で考えたり判断したりできる機会（買い物ごっこや係など）を意図的に計画し、教師の援助や環境の構成を工夫

話し合いたいポイント 4

できればチャレンジ!

上記の学びや成長は、 3つの資質・能力の育ちにどうつながっているか



これらは個別に取り出して身につけさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で一体的に育んでいくことが重要。

幼児理解が深まったあの頃、あの場面

2園の先生方に、子どもを見取る姿勢が変わったり、気づきを得たりした経験をうかがいました。

甘え下手の子どもが甘えてきたとき 固定観念にとらわれていた自分に気づいた



大徳学園 1歳児担任 池上千尋先生

保育者は知らず知らずのうちに、自分の育った環境に引きずられて保育をしているのかもしれない。そう気づかされた瞬間が、1年目にありました。

1歳のHちゃんのオムツを交換していたときのことです。Hちゃんは自分で履くことができたので、いつものようにオムツを渡すと、珍しく「イヤ」と言って突き返されました。

自分でできることは、しっかりと自分でやる子どもに育ってほしい。そう願っていた私は再びオムツをHちゃんに渡しましたが、また返されてしまいました。そのやり取りを3回繰り返したところで、横で見ていた先輩が「Hちゃんは、どうしてほしいんだろうね」と、諭すようにつぶやきました。その言葉の意味を考えた私は、ハッとしました。なぜ私は、こんなにも自分の考えを押し通そうとしているのだろう、と。

もともとHちゃんは甘え上手ではなく、「どうしても」というときだけ、そっと甘えてくるような子どもでした。オムツを履かせてほしいと私にねだったのも、このときが初めてだったのです。

自分でオムツを履くのがイヤなのではなく、私に甘えたいのではないか。そう気づいた瞬間、Hちゃんのいじらしさを感じ、思わず涙がこぼれました。Hちゃんは不思議そうな顔をして、そんな私を見つめていました。「ごめんね。一緒に履きたかったよね」と言ってオムツを差し出すと、Hちゃんはそっと片足を上げてくれました。

この一件を機に、自分が幼少期から「できるだけ人に頼らないように」と厳しく育てられてきたことを思

い出しました。その経験が無意識のうちに保育に表れていたのでしょうか。

確かに、自分でできることを頑張るのは大切ですが、子どもですから甘えたいときもあります。どちらを優先すべきかを考えると、やはり子どもの気持ちだと今は思います。

そんな気持ちで接すると、次第に子どもが私を助けてくれるようになりました。私が給食の準備を始めると、自分から手伝うなどの姿が、あちこちで見られるようになったのです。子どもの気持ちに寄り添おうと意識することで、互いに「ありがとう」の気持ちをもって支え合う、まるで家族のような関係に一步近づいた気がします。



「その子は、何を楽しいと思っているの？」 先輩の口癖が私を成長させた

名古屋市立第三幼稚園 主任 堀 智重子先生



新任時代の私を悩ませたのが、当時の主任の先生の口癖だった「〇〇ちゃんは、何を楽しいと思っているの？」という質問でした。子どもの楽しそうな姿を見るだけで満足していた当時の私は、どうしてそれを考える必要があるのかがすぐに理解できませんでした。そもそも、子どもへの対応に精一杯で、一人ひとりの内面に思いを寄せる余裕もなかったのです。

それでも繰り返し質問され、必死に考えて答え、意見をもらううちに、だんだんと子どもが何を楽しんでいるのかを考える習慣がついていきました。例えば、ダンゴムシに夢中の子どもは、たくさん集めて喜んでいるのか、動きを観察しているのか、それとも友だちが持っているから興味を引かれたのか——。実際、こうした違いを踏まえて子どもの気持ちにぴったりと寄り添う言葉をかけられると、子どもとの距離がグンと

近づくことに気づきました。子どもとの信頼関係を築くには、まず保育者が子どもの内面を的確に理解しようとする姿勢が欠かせないと、先輩の指導と経験を通して理解していきました。

子どもを理解する力はすぐには身につかないと、これまでの経験から痛感しています。「きっとこうだ」と思ったら違って、また考える。その繰り返して徐々に育つものだと思います。また、教えられたらすぐに理解できるものでもなく、私自身、先輩の言葉が何年か経ってから、ようやく腑に落ちたこともありました。

1つ確かなことは、考え続けなければ決して子どもを理解できないということです。主任となった今、かつてあれほど私を悩ませた「何を楽しいと思っているの？」が、私の口癖になっています。

頑張りを褒めたつもりが…… 子どもの見取りの奥深さを知る

名古屋市立第三幼稚園 園長 伊藤茂美先生



どれだけ経験を重ねても、幼児理解に終わりはないと、つくづく感じます。

昨年、遊びや活動に自分から入るのが難しいIちゃんという子がいました。ある日、運動会に向けた踊りの練習にIちゃんが入っていました。私はその姿を見てうれしくなり、「頑張っているね」と声をかけました。ところが、Iちゃんはムツとした表情で「頑張ったらんわ」と一言。Iちゃんは輪の中に入っていました。踊ってはいませんでした。きっと「友だちのように踊れない自分」を感じ、「もっと頑張らなくては」と葛藤していたのでしょう。私は本心から頑張りを褒

めたのですが、Iちゃんは次のレベルを求めていたのです。そこまで「踊りたい」という強い気持ちがあることに気づいてあげられず、Iちゃんにとって適切ではない言葉を選んでしまいました。もしIちゃんの内面をしっかりと理解できていたら、みんなと一緒に踊れるように、気持ちを楽にする言葉をかけられたかもしれせん。

幼児理解は本当に難しい。これからも一人ひとりの子どもの思いに少しでも寄り添えるよう努力を続けます。

幼児期の家庭教育 国際調査

社会環境の変化が加速する中、環境に柔軟に適応し、学び続け、課題を解決しようとする「学びに向かう力」の重要性が注目されています。日本、中国、インドネシア、フィンランドで行った国際調査の結果を基に、幼児期における「学びに向かう力」の発達状況や、それを育むために重要となる母親のかかわり、各国の社会・文化の違いなどをご紹介します。

「学びに向かう力」を多様な視点で バランスよく育ててほしい

目白大学 人間学部 子ども学科 准教授

荒牧美佐子先生

あらまき・みさこ

専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。本調査の監修者の1人。



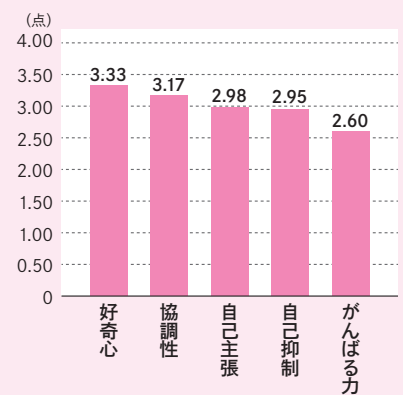
本調査では「学びに向かう力（非認知的スキル）」を、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」という5つの要素で捉えています。幼児期からの育成が重要とされ、幼児期を基礎として、その後も伸び続ける力です。「学びに向かう力」の5要素は、相互に影響し合いながら伸びていくと考えられます。

例えば、人と協働する際には、自分のことを正しく伝え、相手に合わせて自分の感情をコントロールすることなどが必要になります。人を押しのけてでも自分を貫くことではなく、意に反してまで我慢することでもない。「自己主張」と「自己抑制」とが両輪となり、「協調性」もその中で伸びていきます。このように「学

図1 「学びに向かう力」を構成する5つの要素と項目

好奇心	<ul style="list-style-type: none">新しいことに好奇心をもてる好きなことに集中して遊べる工夫して遊べるわからないことについて「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる
協調性	<ul style="list-style-type: none">遊びなどで友だちと協力することができる人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる遊ぶとき、「入れて」「一緒に遊ぼう」「貸して」など友だちに声かけができる友だちとけんかしても、謝るなどして仲直りができる
自己主張	<ul style="list-style-type: none">自分が何をしたいかを言えるほしいもの、してほしいことを大人に頼める困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる友達からいやなことをされたら、「いや」「やめて」などと言える友達と意見が違っても、自分の意見を主張することができる
自己抑制	<ul style="list-style-type: none">人の話が終わるまで静かに聞けるルールを守りながら遊べる遊びなどで順番が回ってくるまで待てる夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる遊びを中断されても、時間をおいて続けられる自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる
がんばる力	<ul style="list-style-type: none">物事をあきらめずに挑戦することができるどんなことに対しても、自信をもって取り組める自分でしたいことがうまくいかないときでも、工夫して達成しようとするすることができる一度始めたことは最後までやり通せる

図2 「学びに向かう力」5要素の
発達状況（日本の6歳児）



※得点の出し方：「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」の各項目において、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「どちらともいえない」を2点、「あまりあてはまらない」を1点、「ぜんぜんあてはまらない」を0点として算出し、平均点を出した。

※回答者数362人。

「幼児期の家庭教育国際調査」の調査概要

調査対象：4歳～6歳（就学前）の子どもをもつ母親

調査項目：生活習慣・学びに向かう力（非認知的スキル）・文字・数・思考（認知的スキル）／母親の養育態度・行動／メディアとのかかわり／母親の教育観・子育て観／教育・しつけの情報源など。

調査国（地域）／調査時期／調査方法／有効回答数：

- 日本（首都圏）／2017年3月／インターネット調査／1,086人
- 中国（北京市・上海市・成都市）／2017年6月／幼児園通しの自記式質問紙調査／2,778人

- インドネシア（ジャカルタ市、他近郊4市）／2017年5～7月／調査員の戸別訪問による聞き取り調査／900人
- フィンランド（エスポー市、他3市）／2017年6～7月／保育園通して配信されたインターネット調査／180人

※図表・文中では国名を記載しているが、調査は各国の都市圏で実施しており、調査国全体の平均値を示すものではない。

※各国の小学校入学月の1～3か月前に時期を合わせて調査を行った。

※中国のみ「無答不明」が生じたため、除外して算出した。

引用・転載時のお願ひ 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください。（例：ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育国際調査」(2018)）

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。▶ <https://berd.benesse.jp/> または

ベネッセ 家庭教育国際調査 検索

「学びに向かう力」は、個々に育てるのではなく、全体をバランスよく伸ばしていくことが大切です。

今回の国際調査では、「学びに向かう力」を子どもの具体的な姿として表し（図1）、同じ聞き方で各国の調査を行いました。注目すべきは、社会文化的背景が異なる4か国の母親の回答が似た傾向を示したことです。

図2は日本の結果ですが、他の3か国も同様に、「好奇心」の得点が最も高く、「がんばる力」の得点がやや低い。つまり、自分の意思で苦手なことに取り組む力はまだ十分ではないものの、いろいろなことに興味をもち、好きなことなら一生懸命になれるという姿は共通しているようです。

さらに、4か国とも母親が子どもの気持ちに寄り添い、尊重するようなかかわり（「寄り添い型」の養育

態度（図3））をしているといった共通傾向が見られ、寄り添い型のかかわりであるほど、子どもは「新しいことに好奇心をもてる」（「好奇心」の項目）、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」（「がんばる力」の項目）の比率が高いことがわかりました（図4）。

とはいえ、保護者のかかわりに“ベスト”があるわけではありません。この結果は、「好奇心」や「がんばる力」を育む上では、子ども自身の意欲を尊重し、自分で考える力を大切にするという、寄り添い型のかかわりが重要であることを示しているのではないのでしょうか。保護者も園の先生方も、年齢に応じてできる範囲を広げられるよう、伴走者のように寄り添いながら「学びに向かう力」を子ども自身に育み、自分の意思で動けるように支援していくことが大切だと考えます。

「学びに向かう力」は、園で既に取り組まれているさまざまな活動を通して伸びていきます。その際に、園の先生方には自園の活動がどのような力を育てているかを振り返る視点として、「学びに向かう力」の各項目を活用していただければと思います。振り返りの視点として「10の姿」を活用されている園もあるでしょう。どちらも子どもの成長する姿として最終的には重なるものなので、取り入れやすい方でかまいません。よりよい活動とするための振り返りの視点を多くもち、今育てている力が将来につながることを意識していただきたいと思います。それは、日々の子育てに試行錯誤する保護者への力強い支援にもなるはずです。

図3 母親の養育態度の型と項目

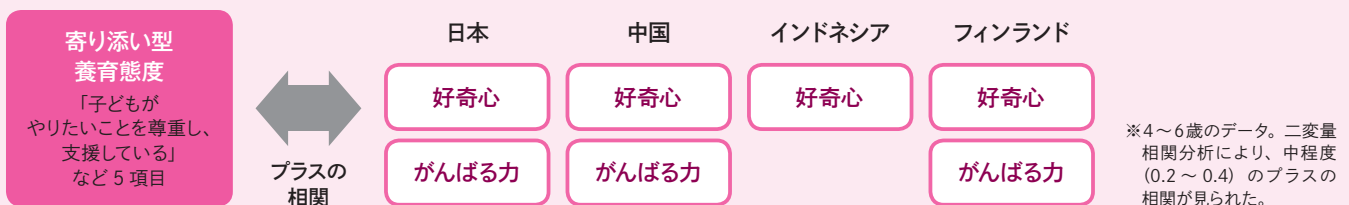
寄り添い型

- 子どもがやりたいことを尊重し、支援している
- どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている
- 子どもに対して否定的ではなく、前向きで積極的な態度をとるよう心がけている
- しかなるとき、子どもの言い分を聞くようにしている
- 子どもが自分でやろうとしているとき、手を出さずに最後までやらせるようにしている

保護型

- 私が一緒にいてあげないと、子どもは自分のことができないのではないかと心配になる
- 子どもに対して過保護である
- 子どもがしようとしていることすべてにわたってコントロールしようとしてしまう
- 子どものことを、年齢より幼く扱うことが多い
- 子どもを私に頼らせようとしている

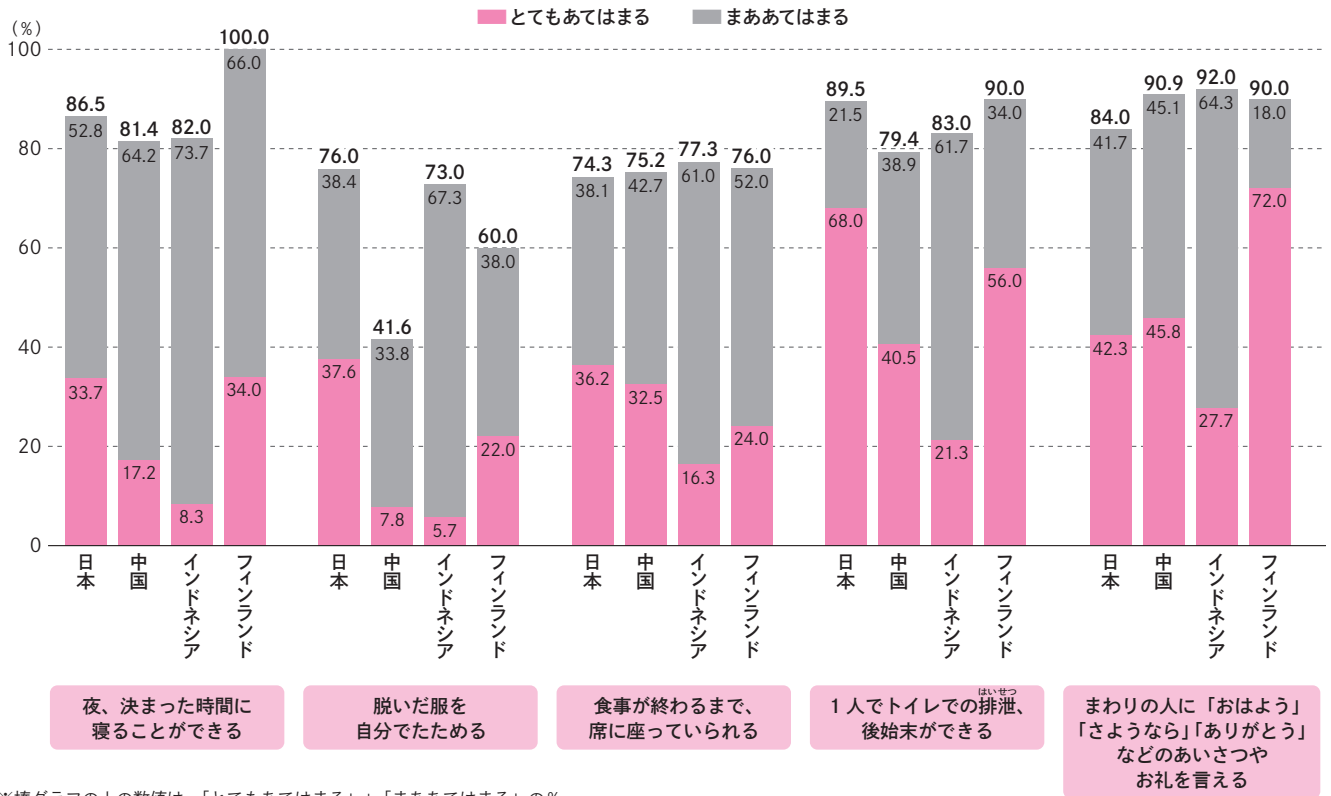
図4 「学びに向かう力」と母親のかかわり



1

子どもの生活習慣（6歳児）

日本の子どもの生活習慣は
全体的にバランスよく身につけている



夜 決まった時間に寝ることができる」は、フィンランドが100%と4か国の中で最も高いですが、他国も80%以上を示し、全体的に身につけていると言える生活習慣です。また、「食事が終わるまで、席に座っていられる」は75%程度、「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」は85~90%程度と、各国の差はあまり見られません。

一方、「脱いだ服を自分でたためる」は、中国が41.6%という低い結果になり、「1人でトイレでの排泄、後始末ができる」も、中国がやや低い結果になりました。身につけるべき生活習慣として何を重要視するかという意識の差がありそうです。

日本の子どもは比較的バランスよく、生活習慣が身につ

いています。核家族化が進み、祖父母世代や地域の人々とのかわりが減りつつある日本では、子育ての多くの部分を家庭と園だけで行うことが主流になっています。このような状況下で、日本の母親は頑張っていると言えるのではないのでしょうか。

荒牧先生
から
メッセージ

子どもの生活習慣づけに関して、家庭と園との間で役割の線引きをすることはなかなか難しいかと思います。生活習慣が十分に身につかない子どもがいた場合、保護者と連携しながらサポートするのが園の役割だと考えましょう。周囲の人へのあいさつなど、園でもできることは積極的に取り組み、家庭と園の両方で子どもを育てるという意識が大切です。

ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室 主任研究員

持田聖子 もちだ・せいこ

データ解説・本調査の担当





















妊娠・出産期から乳幼児をもつ家族を対象とした調査・研究を担当。主な調査は、「妊娠出産子育て基本調査」「未妊レポート——子どもを持つことについて」など。生活者としての視点で、人が家族をもち、役割が増えていく中での意識・生活の変容と環境による影響について調査・研究を行っている。



2

家庭にあるものの使用（視聴）頻度（子ども）

各国共通でテレビの頻度が高く
日本では新しい情報機器の頻度が他3か国より低い

	日本	中国	インドネシア	フィンランド
1位	テレビ  93.3%	絵本  66.1%	テレビ  96.3%	テレビ  90.0%
2位	絵本  57.2%	テレビ  57.4%	スマートフォン  63.7%	絵本  77.2%
3位	ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー  51.2%	知育玩具（積み木、ブロックなど）  47.5%	ワーク（子ども向けの「ワーク」や「学習用ドリル」など）  38.7%	知育玩具（積み木、ブロックなど）  46.7%
4位	知育玩具（積み木、ブロックなど）  41.6%	ワーク（子ども向けの「ワーク」や「学習用ドリル」など）  27.4%	ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー  38.4%	タブレット端末（iPad など）  46.6%
5位	ワーク（子ども向けの「ワーク」や「学習用ドリル」など）  31.7%	タブレット端末（iPad など）  21.5%	タブレット端末（iPad など）  27.3%	ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー  33.9%

※1 各国の上位5位までを表示。 ※2 数値は、「週に3日以上」使用するの%。

4 各国とも上位に入るのはテレビで、テレビは子どもにとって最も身近なメディアだと言えそうです。絵本は日本、中国、フィンランドでは上位ですが、インドネシアは他国と比べて絵本の所有率自体が低く、使用頻度も5位以内に入りませんでした。

日本に特徴的なのは、タブレット端末やスマートフォンといった新しい情報機器の使用頻度が5位以内に入らなかったことです。一方、中国、インドネシア、フィンラン

ドでは、タブレット端末が5位以内に入りました。タブレット端末の使用頻度が4か国の中で最も高いフィンランドでは、就学前教育である「プリスクール（エシコウル）」のグループ活動で活用されることもあるようです。

今後、日本でもこれら情報機器の所有率や使用頻度が高まることが考えられるため、子どもにどのように与え、かわせるかを考えていくことが課題になりそうです。

各国別 幼児の母親の 有職率・ 子育て意識

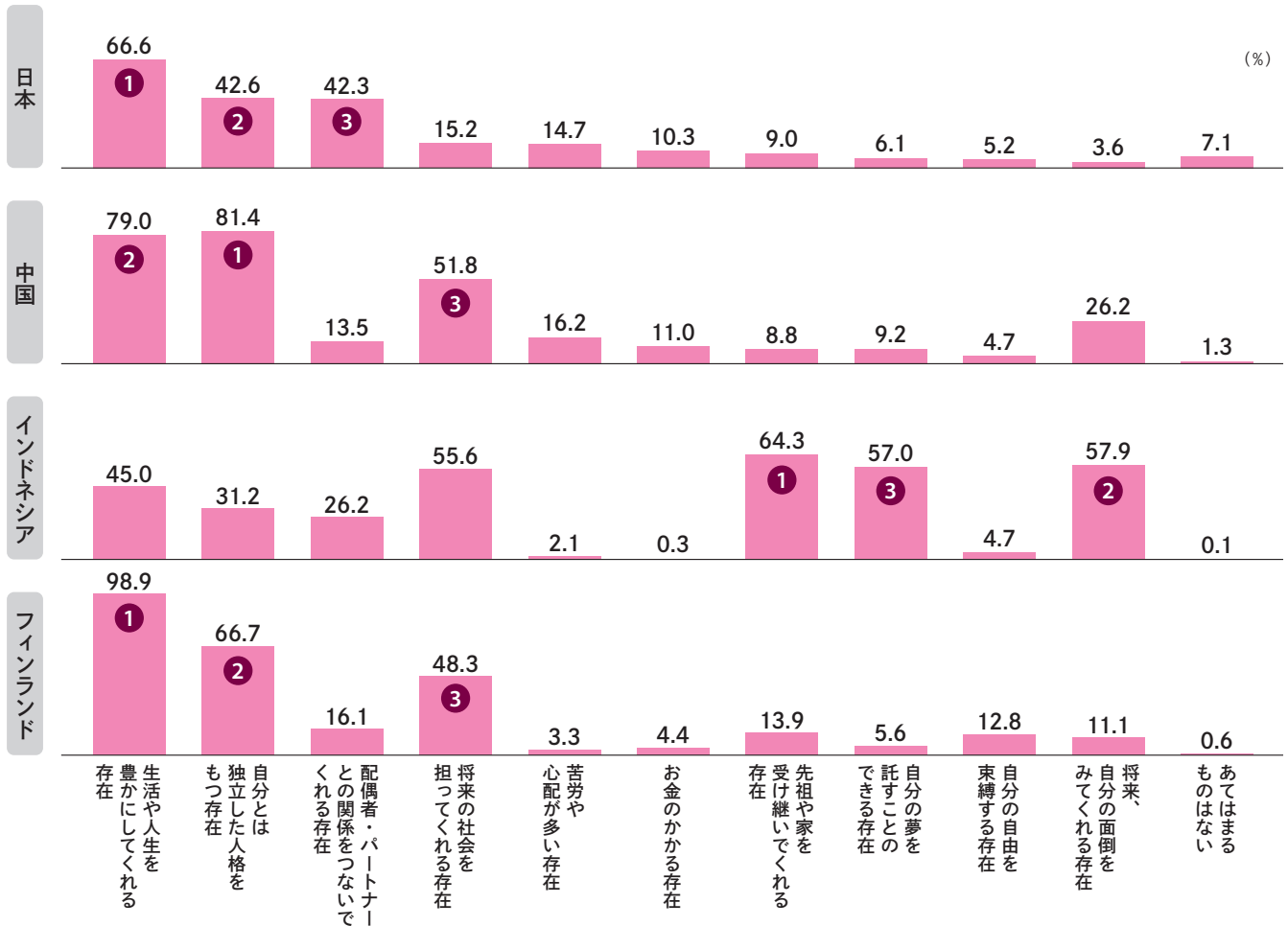
- 日本** 母親の有職率34.3%。子育てにおいては、自立、生活習慣、協調性を重視。他人に迷惑をかけないことを願う比率が高く、将来の社会を担うという意識が低い。
- 中国** 母親の有職率90.0%。子どもへの進学期待が4か国中最も高く、習い事に通う比率も最も高い。また、80%以上が子どもを自分とは独立した人格と捉えている。

- インドネシア** 母親の有職率19.2%。イスラム教の影響を受ける。家族意識や家系継承意識が非常に強く、自分より子どもを優先する。子どもへの進学期待も高い。
- フィンランド** 母親の有職率84.5%。80%以上が、子育てとともに自分の生き方も大切にしたいと考え、母親が常に一緒になくても愛をもって育てればよいと考えている。

3

母親にとっての子どもという存在

各国とも、子どもは生活や人生を豊かにする存在
日本では、社会を担う存在という意識が低い



※1 複数回答。 ※2 日本の降順に表示。 ※3 各国の上位3位までの項目に①②③と表示。

4 各国すべてで一定の比率を示したのは「生活や人生を豊かにしてくれる存在」でした。「苦労や心配が多い存在」「お金のかかる存在」といった否定的な項目はどの国も20%を下回り、子どもをポジティブな存在として捉えていることがうかがえます。

一方「将来の社会を担ってくれる存在」は、中国、インドネシア、フィンランドが50%前後であるのに対し、日本は15.2%でした。グラフには表していませんが、「子どもの将来に対する期待」に関する設問でも、日本は「社会のために尽くす人」という回答が3.5%と4か国で最も低いという結果が出ており、子どもを社会に貢献する存在として捉える意識が低いようです。

そのほか、上のグラフで特徴的なのは、インドネシアの回答傾向でしょう。「先祖や家を受け継いでくれる存在」「将

来、自分の面倒をみてくれる存在」「自分の夢を託すことのできる存在」が他国よりも30ポイント以上高い数値となっています。インドネシアでは、家を守っていくための大切な存在として、子どもを捉えていることがわかります。

荒牧先生
から
メッセージ

私が身近に接する大学生も、就職活動の際に、自分の適性や能力を踏まえて職業選択を行うことは当たり前であっても、職業を通して、どのように社会に貢献できるかという視点をもつことは少ないようです。どちらかという身の回りだけに向きがちな意識を社会に向かって開き、自分も役立つ人間になれるという気持ちを育むことが必要ではないでしょうか。

4

母親の教育・しつけに関する情報源

日本の母親の主たる情報源は 家族や友人・園の先生やインターネット

		日本	中国	インドネシア	フィンランド	(%)
家族	配偶者・パートナー	58.8	41.3	86.1	51.1	
	あなたの親	46.0	23.1	54.4	41.7	
	あなたのきょうだいや親戚	18.6	11.8	27.3	21.7	
	配偶者・パートナーの親	16.6	9.6	27.6	11.1	
	配偶者・パートナーのきょうだいや親戚	3.9	4.6	11.7	2.2	
社会	あなたの友人・知人	52.1	52.2	33.0	63.9	
	園の先生	39.8	57.5	49.7	52.2	
	子どもの習い事や教室の先生	17.7	30.7	9.1	1.7	
	子育てサークルの仲間(日本)/ 幼稚園などで知り合うママ友 ^{*1}	7.7	57.2	4.1	8.9	
	教育の専門家 ^{*2}	-	20.2	-	-	
	病院の医師や看護師	7.0	8.7	1.2	6.7	
	保健師や栄養士	3.9	4.0	0.8	1.7	
	市区町村の子育てサービス窓口の人	2.8	1.2	3.3	25.6	
	配偶者・パートナーの友人・知人	1.8	8.4	6.0	1.7	
	インターネットやブログ	32.3	25.9	16.4	48.9	
メディア	テレビ・ラジオ	19.2	16.5	18.4	7.8	
	育児・教育雑誌	15.1	23.9	3.2	13.3	
	育児書や教育書などの書籍	10.9	43.3	3.0	15.6	
	ソーシャルメディア(Facebookなど)	8.4	58.8	6.4	12.8	
	新聞	6.0	6.4	0.2	11.1	
その他	1.3	0.8	0.1	4.4		
特になし	8.5	0.9	0.2	8.3		

幼稚園児の
母親の場合
38.1%
保育園児の
母親の場合
49.2%

※1 複数回答。

※2 網掛けは50%以上の項目。

*1 各国の事情に応じて翻訳している。「育児を通して知り合った仲間(中国)」「子どもの学校などで知り合った仲間(インドネシア)」「地域の父親・母親仲間(フィンランド)」。

*2 中国のみの項目。

各 国に違いが見られる中、「配偶者・パートナー」「あなたの友人・知人」「園の先生」は、各国とも比較的上位に入りました。日本の「園の先生」は39.8%で、他国と比べるとやや低くなりました。ただし、子どもの就園先別に見ると、保育園児の母親の「園の先生」は49.2%です。保育園では、送迎時の会話や連絡帳など、園と保護者とのコミュニケーション手段が多いことが関係するかもしれません。

国別に見ると、中国は「ソーシャルメディア」の比率が高く、「育児書や教育書などの書籍」の情報も低くありません。インドネシアは家族を頼る比率が高く、メディアから情報を得る比率は4か国で最も低くなりました。フィンランドは「ネウボラ」という未就学児までの公的な家族支援制度があるため、「市区町村の子育てサービス窓口の人」

が他国より高い比率です。日本は主に周囲の人々や「インターネットやブログ」から情報を得ているようです。

日本でも今後、子育てにおける園の役割が高まっていくことを踏まえると、情報源としての園の先生方の重要性がますます高まりそうです。

荒牧先生
から
メッセージ

今後に向けた保護者とのコミュニケーションは、各園ともに非常に工夫のしがいがある課題でしょう。例えば、家庭では見えづらい「協調性」を園でどのように育てているか、園が積極的に伝えれば、保護者も子どもの成長を多角的に捉えられるようになります。園と保護者が互いを子育てのパートナーと考え、よいパスを出し合っ、それぞれに見える子どもの姿を緊密にやり取りし合えるような関係を築いていけるとよいのではないのでしょうか。



表紙／裏表紙

愛知県 名古屋市立第三幼稚園

◎一人ひとりの子どものつばやきや表情をつぶさに見取りながら、「やってみたい」という興味・関心を育てることを大切にしている名古屋市立第三幼稚園。保育者の幼児理解をさらに深めているのが、園内のさまざまな場面で行われている保育者同士の語り合いです。

刊行に寄せて ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

**「これからの幼児教育」ウェブサイトでは
すべての記事を無料でダウンロードできます**

◎過去3回の特集テーマ

- 2018年 春号 『遊び』の大切さを保護者にいかに伝えるか
- 2017年 秋号 新要領・指針を生かす！ 次年度計画の検討ステップ
- 2017年 春号 ニッポンの幼児教育は、どう変わるのか？

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っていません。

<https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/> または

ベネッセ これからの幼児教育 で 検索

